

## 第6話 恐ろしき華厳の滝と、向かえ下りのいろは坂の巻

湯の湖は、静かな山奥の湖です。硫黄の匂いに思わず温泉に誘われそうな気分になりました。実際湖畔には日帰りできる温泉もあります。めぐさんの説明では湯の湖の水質は随分悪くなってしまったそうです。水辺の見事な葦の群生が湖の再生に一役買っていきそうです。でも私には汚れているようには見えませんでした。ごみ一つ無い美しい湖です。ドライブは続きます、いよいよ華厳の滝。

ただっ広い駐車場が有数の景勝たることを物語る華厳の滝、大人数を一度に運べるエレベーターに並び 100m も下って見学します。華厳の滝は水量も見事で、中央の 100 mの高さを一気に流れ落ちる王様のような滝を囲んで、大きな鳥が羽を広げつつあるような両の翼から行く筋も流れ落ちる滝が、真中あたりの段でラインダンスのように見事に揃って水しぶきをあげています。素晴らしい景観。お腹に響く滝壺の轟音と顔にかかる水しぶきは、しばし体が芯から再生されるような爽やかな時空を運んでくれました。でも足元の渦巻く急流を見てしまったらもうたまりません。怖い、ものすごく怖い、あそこに落ちたらもうおしまい、なんて思った途端、



むずむずしてしまって、駄目です。追いかけるように見物のおじさんが、「ここで自殺すると絶対上がらない、完璧だ」なんて言うものですから、いけません。そわそわと帰りのエレベーターに向かいます。皆落ち着いているなあ、ホントは怖いのかなあ。地上に戻って、滝に正対する展望台で落ち着いた気持ちで再び見学、下が見えないと言うことは、どれほど安心かわかりません。怖がりにはこちらの展望台がお勧めです。めぐさんと麗さんは、警備員のおじさんを口説いて一緒に写真を撮っています。お目当ては猿を脅かす鉄砲なのですが、おじさんときたら上機嫌、結構なことです。さてこちらの巨大駐車場のトイレが、かの有名なめぐさんの忘れた財布がそのままあった縁起の良いトイレです。皆でご利益に預かるべく、入りました。再び日暮れ前にいろは坂をやっつけるべく、日光の町に向かって出発です。下りのいろは坂、すっかり有名になってしまったお猿さんを見つけては、はしゃぎ・・・私はやっぱりおやすみなさい。

日光の町に入ると、帰りの客で道路は混み始めていました、でもそこは地元のめぐさん、裏道に入ると、お地蔵様がずらずらと並んだ面白い場所に案内してくださいました。賑や

かな街中から一步入っただけですが、そこは深山幽谷の趣。大きな岩の間を走る水が全ての動きを止めたかに見える深い淵の傍には東屋があって、弘法大師が筆を投げて書いたとされる、梵字が書かれた岩を望めるようになっています。居合わせた紳士が、どの岩にかかっているか説明して下さいなのですが、老眼の上弱くなった日差しの中では、さっぱりわかりません。しつこく尋ねるのも失礼ですから早々に諦めて、溪谷を眺めるように並んでいるお地蔵様を



辿ります。それぞれの作り手に似た顔になるのでしょうか、大きさも表情もさまざまな、座禅を組んだお坊さんの姿のお地蔵様たち。風化やいろいろな災害の影響で、お顔を無くしたもの、傾いてしまったものから、苔の袈裟をお召しになったりっぱなものまで、数え切れないお地蔵様でした。化け地蔵の謂れは、行きと帰りでは必ず数が違うというもの、端から数えることを諦めていました。

一人で運転しているめぐさんは相当お疲れの様子です。金谷ホテルで、休憩することにしました。金谷ホテルは日本一古いリゾートホテルで、明治時代からの建物とアンティークな調度が大変魅力的です。ホテルの中を拝見して、お上品にお茶を頂きました。(真っ赤なうそでした。人のケーキを食べるし、どこまでも賑やかな 4 人です)

続く